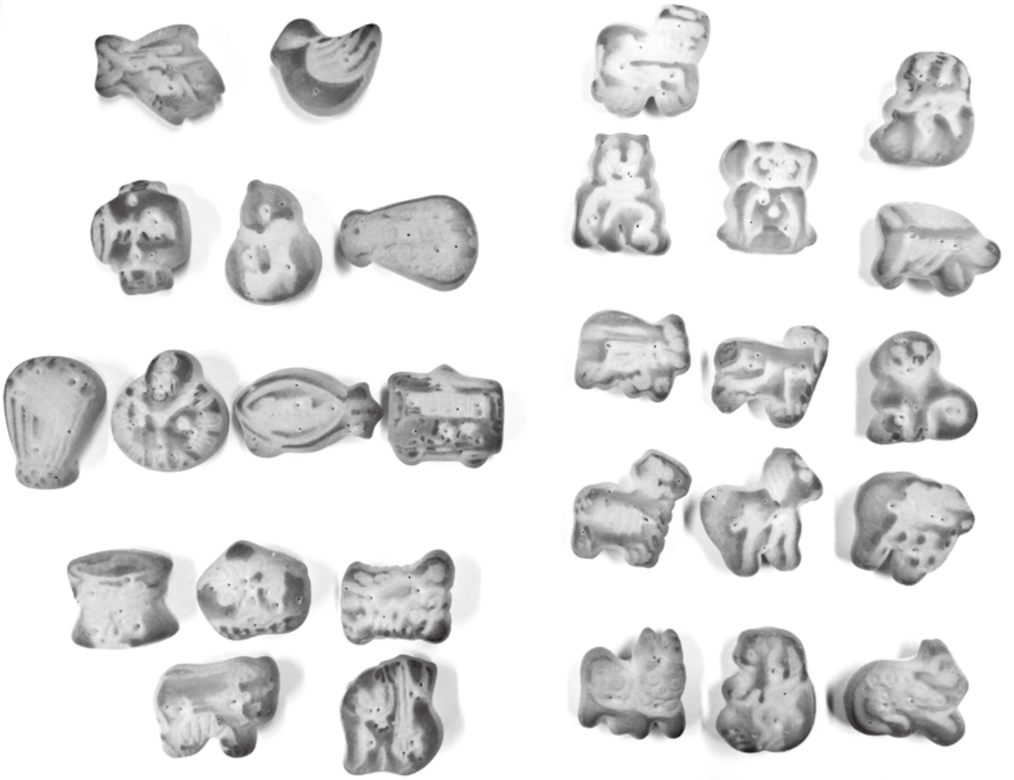
もくじ
ごぞんじですか動物ヨーチ　1P　　北千住駅の今昔　2P　　地元の古代④　3P
デザインアイデア合戦とパネル展　4P　　ここで見て足立の博物館資料　4P

足立史談
第572号
2015年10月15日
足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
〈27-308〉



ごぞんじですか動物ヨーチ

特別展「スイーツランド・あだち―東京東部のお菓子づくり―」より

会期：10月20日から12月6日

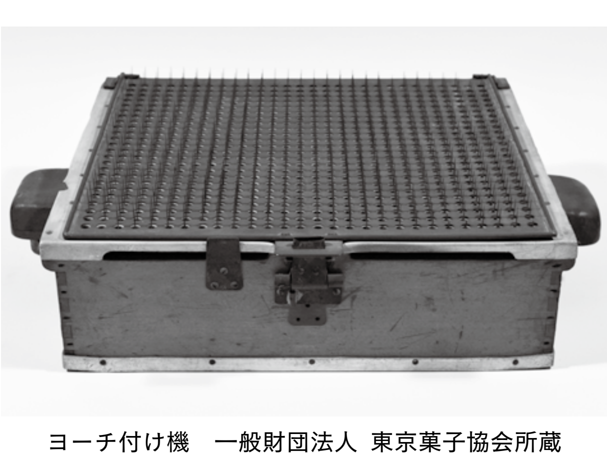
■お菓子産業がテーマの展示です
モノづくりの盛んな足立区ですが、実はお菓子もそのひとつです。今回の特別展はお菓子づくりを取り上げました。展示のなかのひとつ、動物ヨーチについてご紹介しましょう。

■動物ヨーチとは？　ごぞんじですか？　ビスケットに、ピンク、クリーム、黄緑など淡い色の砂糖掛けされたお菓子です。動物ヨーチの歴史は古く、昭和の初めころにはあったようですが、盛んに食べられたのは昭和三〇年から四〇年代半ばのころ。

名前の由来は、動物型のビスケット、ということと幼稚園のヨーチ、もとはキンダーガーデン（幼稚園）ビスケットという、英国のお菓子から来ているともいわれています。製造者はこのビスケットにつけるクリーム状になった砂糖液のことをヨーチとよんでいます。

時代が下がるにつれ、つくるメーカーがなくなり、現在では関東に二軒、全国でも四軒くらいしかないとのことです。その貴重な一軒が足立区梅島の黒川製菓です。看板も何もない住宅地のなか、甘い香りがただよっています。むかしながらの手づくりで、動物ヨーチが作られています。こうした家族的工場が足立区の特徴のひとつでもあります。

■つくり方　左の写真は、この動物ヨーチづくりに使われる要の道具。実は、とても細かい針が並んでいます。このヨーチ付け機の持ち手を両手で逆手に持ち、針のついた面を下



ヨーチ付け機　一般財団法人 東京菓子協会所蔵

にして、びっしりと並べられたビスケットにプスッ。針にビスケットを刺したまま、ヨーチがたっぷり入ったフネに、ちょっとだけ浸すのです。ちょうど半分だけビスケットにヨーチがつくように、その加減が難しいところです。

ヨーチを付け終わったら、再びひっくり返して上向きにします。そして、この持ち手、ぐっと押して下げると、針が引っ込むようになっています。すると、上にのっている板のうえに、針からはずれた動物ヨーチだけが自然に残るという仕組み。

ヨーチを乾かすための網にさっとすべらせて移したら、再び、持ち手を上に上げると、また針があがるというわけです。動物ヨーチには、小さな穴があいていますが、この針の穴だったのですね。

動物の種類は、三〇種類くらいというので、一袋を調べてみたら二八種。動物だけではなく、ハト、さかな、懐中時計・飛行船・小槌・ヒョウタン、なんだか縁起物も入っているような…。さるかに合戦でしょうか、鉢巻をした臼と栗、そしてカニとサル？　ちょっと、区別がつかないものもありますが、これなんだろうと、みんなでワイワイ話しながら食べたら楽しいですね。

（郷土博物館学芸員）

北千住駅の今昔

佐藤貴浩

最近、北千住駅とその周辺の写真を掲載したいというメディア関係者の要望が多い。株式会社リクルート住まいカンパニーの「二〇一五年版みんなが選んだ住みたい街ランキング　関東版」によると、「『今後注目が集まり、地価が値上がりしそう』と思う駅」ランキング第八位、「複数路線が乗り入れ、起点となるターミナル駅まで十分程度にもかかわらず、物件価格が安く暮らしやすい、実は穴場」ランキングでは、二位を引き離してダントツの一位であった。こうしたことから、北千住への注目が高まっているようだ。そこでここでは、北千住駅周辺の写真から、北千住駅の歴史を見てみたい。

そもそも、北千住駅が開業したのは、明治二九年（一八九六）のことである。日本初の私鉄日本鉄道土浦線の「北千住停車場」として開業した。前年には日清戦争が終結し、下関条約が結ばれている。まさに日本が近代化への道を進んでいる時期であった。明治三二年には、東武伊勢崎線が開業し、日本鉄道土浦線と東武伊勢崎線の乗り換え駅となった。乗り換え駅として発展する端緒が開かれたのである。明治三九年には、日本鉄道が国有化（旧国鉄）され、明治四二年には常磐線と改称されている。

図1は、明治三二年に建築された駅舎で、昭和三二年頃の西口の様子である。現在の駅舎は、常磐線・伊勢崎線・千代田線・日比谷線・つくばエクスプレスの五路線が乗り入れるターミナル駅にふさわしい地上四階地下二階という立派な建物となっているが、昭和三十七年まで乗り入れ路線は、常磐線と東武伊勢崎線の二路線のままだった。昭和三十七年に日比谷線が乗り入れることになったため、駅舎を大改修したのである（図3）。そして昭和四十四年に千代田線が乗り入れるようになり、一大ターミナル駅へと変貌していった。

図1　北千住駅西口（昭和32年頃）

図1を見ると、駅舎の前に南国風の木が植えられており、エキゾチックな感じを受ける。

画面左側の手前には、広告が書かれており、やや見づらいが一番下の広告（図2）には「女はそれを我慢できない　美女の中の美女　島の女　8日ヨリ」とある。これは千住ミリオン座の広告で、千住ミリオンは昭和二十五年に現在の千住保健総合センターがある場所に開館した洋画専門の映画館で、惜しまれつつ昭和五十七年に閉館した。公開された映画は、一九五七年公開の「島の女」というハリウッド映画だと推測される。これは、イタリアの有名女優で、アカデミー主演女優賞に輝いたこともあるソフィア・ローレンの出世作。ソフィア・ローレンは、日本のテレビコマーシャルにも出演したこともある。まったくの余談だが、城みちるのヒット曲「イルカに乗った少年」は、この映画の中で、ソフィア・ローレンがイルカに乗った少年の像を発見したシーンに由来し

図2　広告部分の拡大

ているそうだ。

図３　改修した北千住駅

図3は、大改修後の北千住駅の写真である。南国風の植物は残っている。図1と比べると、三階建ての立派な建物となっているのがよくわかる。地下鉄の開通にあたっては、商店街で全店大売出しと花で飾った自動車のパレードが行われた。

こうして北千住は、乗り入れ路線が増え、利用者数も増加の一途をたどり、平成四年から新たな大改修が加えられ、平成一七年にはつくばエクスプレスも開業し、現在の人気な街千住となるのである。

（郷土博物館専門員）

おでかけ下さい　地元の古代 ④

足立区地域文化課文化財係

伊興遺跡公園展示館

古代人のファッション点検

伊興遺跡公園展示館には、古墳時代の祭りを主導した巫女とその侍女、ムラの長と青年、武人の姿を再現した古代人の人形が計六体展示されています。

古墳時代当時の毛長川沿いの様子を再現したジオラマが正面入り口のすぐ右手にあり、その上部にムラの長と青年、二名の武人が置かれています。巫女と侍女は、正面入り口から右斜め前方の展示ケースの上部に設置されています。

古墳時代の豪族などの特権階級の人々の服装は、主に古墳から出土する埴輪などから再現されています。現代と異なり当時の人々は衣服を左前に着用していることに注目して下さい。

これらの人々が衣服に使用した繊維は主に麻で、これを機織り機の前身である紡錘車で紡いで麻布をつくっていたようです。高松塚古墳内の壁画にもあるように、現在の伊興遺跡にあったムラの中の上層部の人々も麻布を染色した衣服を纏っていたと思われます。

そのため、人形の巫女も通常の麻布の衣服の下に紫色の麻布の衣服を着用しています。なお、巫女の頭頂部にある髪飾りの横櫛は、実際に伊興遺跡の発掘調査で出土したものをモデルにしてつくられています。また、女性は島田髷といわれる頭頂部に髪を団子状にして盛る髪型をしています。

いっぽう、武人などの男性は美豆良（みずら）とよばれる特徴的な髪形をしています。この美豆良には下美豆良と上美豆良の二種類があり、長と青年は前者で、二名の武人は後者の髪型をしています。

そして、男女とも顔に赤い塗料を施しているのが印象的です。これは、本人がもっている力を増幅させるというようなことを願掛けしたまじないであったと推定されています。

是非、現代とは異なった当時の人々のファッションをチェックしにいらして下さい。

（遺跡発掘調査員　増田静香）

左からムラの長・青年・二名の武人

右から巫女・侍女

【お問合せ】
文化財係
電話　〇三－三八八〇－五九八四

千住酒合戦から二〇〇年
デザイン・アイデア合戦とパネル展
郷土博物館

文化十二（一八一五）年十月二一日、現在の千住一丁目二四番にあった飛脚宿、中屋を会場に、酒合戦という催事が行われました。

後水鳥記図巻（谷文一筆酒戦図部）

この催事は千住の文人、弥勒庵鯉隠が、親しかった江戸の著名文人たちを誘い企画されました。

江戸琳派の祖として知られる酒井抱一、絵師の谷文晁・文一、さらに儒学者・書家の亀田鵬斎、そして戯作者の大田南畝が招かれています。足立出身の戯作者、竹塚東子も名を連ねています。鯉隠は事前に彼らのところを訪ねて相談して酒合戦の当日を迎えました。冒頭の日付は、現在の暦に直すと十一月二一日と、ちょうど一月後になります。立冬を過ぎた季節でした。

■文芸作品を創る酒合戦　絵師、書家、戯作者たちが集まっていたのは、酒合戦を題材に、絵巻や漢詩文、戯作を創作することが目的だったからでした。酒合戦自体は、およそ一〇〇人が参加、左右に分かれ二人が相対するように呑み比べが行われました（亀田鵬斎「高陽闘飲序」）。

酒合戦は話題となり翌年には番付が版行され、翌々年の文化十四（一八一七）年には創作された書画の展覧会が千住仲町の源長寺で開かれました。

■デザインアイデア合戦とパネル展

酒合戦で作品を創ったという故事にならい、二〇〇年目の今年、郷土博物館では館蔵絵画を用いたデザインアイデアを募集しました。現在、多彩な作品が集まっております。応募作品の紹介と投票、そして千住酒合戦や千住の歴史と文化を紹介するパネル展「千住酒合戦&歴史大全」を左記のとおり開催します。どうぞ会場にお越し下さい。※投票は11月14日まで。

▼会場＝東京電機大学ギャラリー（北千住駅東口徒歩1分）　**▼会期**＝10月31日～11月23日（時間は午前10時～午後4時　**▼お休み**＝11月2・8・15・22日の東京電機大学の休校日はお休みです　**▼入場料**＝無料　**▼お問合せ先**＝郷土博物館（TEL三六二〇―九三九三）

ここで見て足立の博物館資料
とちぎ蔵の街美術館に郷土博物館の歌麿が出張中

遊里の女性たちを生き生きと描き、江戸中後期に一世を風靡した浮世絵師・喜多川歌麿と栃木との関係を紹介する、とちぎ蔵の街美術館「喜多川歌麿展」（11月29日まで）に、郷土博物館の浮世絵が出展されています。

江戸屈指のスター絵師であると共に、筆綾丸（ふでのあやまる）の名で狂歌をたしなんでいた歌麿は、狂歌を通して栃木の豪商たちと深い親交を結んでいました。「喜多川歌麿展」では、そのような栃木の狂歌師との交流を物語る作品を通して、歌麿と栃木との関わりを展観すると共に、歌麿とその弟子たちの画業を紹介しています。

喜多川歌麿《手鏡の母子》
文化期（1804～1818）

郷土博物館では、明治の元勲・松方正義の十三男、松方三郎の旧蔵品を中心に、歌麿一門の作品を十四点収蔵していますが、今回の歌麿展では、歌麿の《手鏡の母子》をはじめ、二代歌麿、式麿ら喜多川派の作品、八点を出展しています。歌麿一門の華やかな美の世界を楽しみに、足を運ばれてみてはいかがでしょうか。

とちぎ蔵の街美術館は栃木県栃木市万町3―23（TEL〇二八二―二〇―八二二八）。月曜休館。開館時間＝九時～一七時　**【入館料】**一般・大高生＝五〇〇円／中学生以下無料です　**【交通】**東武日光線、JR両毛線、栃木駅より徒歩一五分。